

## 「子宮頸癌 —その現状と将来—」

愛知医科大学医学部産婦人科 藪下廣光

### 【要旨】

子宮頸癌は女性性器癌のなかで最も発症頻度の高い癌です。老人保健法に基づく「がん検診」の普及によって早期発見・早期治療がなされるようになり、わが国での子宮頸癌の死亡率は著しく減少しました。子宮頸癌の好発年齢は50歳代であります。近年、30歳代での子宮頸癌死亡率の増加や、20歳代での子宮頸癌前駆病変(上皮内がん)の発症率の増加がみられるようになりました。このことに伴い、子宮がん検診の開始対象者年齢が従来の30歳から20歳へ引き下げられました。

子宮頸癌の発症には、性感染症の一つでありますヒトパピローマウイルス(HPV)の局所感染が深く関与しております。したがって、社会における初回性交年齢の若年化や性活動の多様化は、子宮頸癌発症年齢の若年化を招きます。一方で、初回妊娠分娩年齢は高齢化しており、若年者の子宮頸癌の治療においては、妊孕性の温存とくに子宮温存の可否が大変重要な課題となってきております。

子宮頸癌は、腔細胞診という簡単な検診法によって早期発見が可能な癌であります。全国的にみても検診の受診率は15%に至っていないのが現状です。平成19年4月に施行されたがん対策基本法に基づくがん対策推進基本計画では、癌死亡の20%減をめざしてがん検診の受診率を50%にすることを目標に掲げております。住民検診や職場検診に頼ったままの現状では、この目標は到底達成できないでしょう。自己検診や妊娠などで産婦人科に受診した機会に検診を受けるなどして検診率を上げるとともに、初回受診者/リピーター受診者の比率をあげる工夫をしたり、細胞診検査にHPV検査を加えるなどして検診効率を高めることも必要とされることでしょう。

近年、子宮頸癌の発症に関わるヒトパピローマウイルスに対する予防ワクチンが開発され、欧米の一部ではすでに使用されており、わが国においても臨床試験が進捗して、もう間もなく使用されることとなります。今後、この予防ワクチンが一般的に使用されるようになれば子宮頸癌の発症が激減し、この癌で命を落したり、子を授かる前に子宮を失ったりする方々が少なくなるかも知れません。そのような期待をこめて、子宮頸癌の現状と展望を紹介させていただきます。